

〈論文〉

メキシコの国家再建期におけるフェミニズムと女子教育

—エレナ・トーレスの女子教育観を中心に—*

松久玲子

I はじめに

メキシコ革命の動乱を乗り越え、メキシコは1920年代から1930年代前半にかけての国家再建期に、近代国民国家へ向けた社会変革の第一歩を踏み出した。1921年の公教育省の設立は、国民国家形成の重要な手段の一つだった。国家再建過程で、ナショナリズムの形成や、政治体制、土地改革などの社会変革が実施され、国家と家族の関係にも変化がもたらされた。女性が国家建設に積極的に動員され、既存のジェンダー規範も変化していった。

新たなジェンダー規範は、近代国家に適合するよう政府により一方的に作られたわけではなく、当時の欧米の近代化思想や労働運動、フェミニズム運動の影響を受け、またカトリック教会や保守勢力との力関係のせめぎあいの中で生まれた。公教育は新たなジェンダー規範形成の一端を担い、それを国民に伝達しようとした。教育における新たなジェンダー規範の形成を、国家とフェミニズム運動との相互作用に焦点をあててとらえることにより、メキシコの近代的公教育の特徴と社会運動としての第一波フェミニズム運動を多角的に検討したい。

フェミニズム運動が教育政策にどのような影響をもたらしたのかを分析するために、20世紀初頭の第一波フェミニズム運動を代表する一人であるエレナ・トーレス＝クエジャル (Elena Torres Cuellar 以下エレナ・トーレ

スと略す)の活動に焦点をあてる。エレナ・トーレスをはじめとして、フェミニズム運動を担った当時の女性たちは、国家再建過程に教師などの専門職として参加し、近代国家における新しい女性のジェンダー役割のモデル形成に積極的に関わった。

本論では、まず、フェミニズム運動と教育に関わる先行研究を検討する。次に、第一波フェミニズム運動での女子教育に関する議論を取り上げる。特に合理主義学校運動と欧米の優生学がフェミニズムに与えた影響に着目する。次に、イベロアメリカ大学古文書館所蔵のエレナ・トーレス文庫を一次資料として、エレナ・トーレスがフェミニストとして自己形成する上で合理主義学校運動やフェミニズムとどのように関わったのかを検討する。当時のフェミニズム運動の展開とエレナ・トーレスの個人史を重ね合わせることにより、教育とフェミニズムの関係を解明する一助としたい。さらに、エレナ・トーレスが、フェミニズム運動を推進しつつ教育官僚として立案した教育プログラムに焦点をあて、女子教育におけるフェミニズムの影響を考察する。農村の家庭科教育に反映されたジェンダー役割や規範には、フェミニズム運動が提示したどの部分が採用され、何が棄捨されたかを分析することによって、メキシコの近代公教育の特徴とフェミニズム運動の多面性を明らかにしたい。

II 先行研究と問題設定

女性史に関しては、1970年代から本格的に開始された女性学研究により、それまで存在すら知られていなかった19世紀末からのメキシコのフェミニズム運動の輪郭が明らかになった (Alatorre 1961; Macías 1982; Soto 1979; J. Tuñon 1987)。特に、第一波フェミニズム運動を中心とするメキシコ革命期の研究 (Jaiven 1993; E. Tuñon 1992) は、それまで不可視化されていたメキシコ革命への女性の参加とフェミニズム運動の展開を明らかにした。第一波フェミニズム運動は、1930年代から女性参政権運動に収斂してゆき1938年にその頂点に達したが、最終的にカルデナス大統領の政治的決

定により女性への参政権付与は見送られた。フェミニズム運動史において、19世紀後半の女権運動では女性の教育要求、第一波フェミニズム運動においては民法改正、参政権が運動の中心的テーマとされている。しかし、第一波フェミニズム運動では、政治的権利、市民権における男女平等の要求とともに、性教育や出産調節の問題も論議された (Rocha 1991; 松久2002)。フェミニズム運動史研究では、運動形成過程や要求内容に中心がおかれ、個々のフェミニストに焦点をあてた研究はわずかしかない (Lemaitre 1998; Trinidad 2001)。また、それらの女性たちの活動が、教育などの特定分野にどのような影響をおよぼしたかはほとんど知られていない。

革命期の教育に関しては、教育制度史・政策史を中心にディアス時代、メキシコ革命期、カルデナス時代の政治的動向と教育政策の関係性に焦点があてられた (Larroyo 1976; Morales 1986)。近年では、ディアス時代とメキシコ革命後に展開された教育制度の間の断絶よりも、近代化へ向けての教育の継続性が注目されている (Bazant 1993; Loyo 1999)。しかし、多くの場合、教育における女性の存在や教育政策における女性の位置づけは研究の主流からは外れてきた。

その中で、ヴォーン (Vaughan 1982; 2000) は、教育がメキシコ革命政府の政治的道具でありその政治的帰結として見るだけではなく、地方と中央政府との間の文化的交渉として教育の場をとらえた。その研究では、女性の存在が可視化され、ジェンダーの視点からの分析が加えられている。ヴォーンによれば (Vaughan 2000: 194)、メキシコ革命後においても家父長制は維持され、国家発展のもとで女性解放よりも家庭の国家への従属を目的として家父長制は修正され強化された。また、ローヨは、メキシコ革命期の教育に関して、模範的女性像やジェンダー規範が教育の中でどのように変化したかを、1920年から1940年の間に教育省により出版された学校教科書、教師用パンフレット、雑誌を中心に分析した。その中で、「SEPの刊行物は、社会の団結を促進し、対立を誘発せず、非宗教教育が教会の教育と同じ価値観を促進することを示す方法の一つとして、長期にわたり自己

犠牲的で家庭にだけ専念する保守的な女性の模範を普及した。」(Loyo 2008: 181) と述べ、革命政府の女子教育について保守的傾向を指摘した。

公教育省の設立とともに地方への民衆教育の普及を目指した中央集権的な教育制度の形成過程で、1920年から40年までの諸政権は、伝統的な女性像、ジェンダー規範を維持してきた。そして、この時期のジェンダー規範をめぐるのは、革命政府とフェミニストの間での対立的な構図が描かれてきた。しかし、近代の申し子であるフェミニズム運動と近代化を目指す国家を対立的図式で描くことは、フェミニズム運動がもつ社会運動としての多面的な要素を見落としはしないだろうか。女子教育において展開されたジェンダー規範が、国家とフェミニズム運動の相互作用の中で形成された過程を明らかにすることにより、国家再建期公教育の特徴とフェミニズム運動の多面的要素を解明できると考える。近代公教育を媒体として、女性の役割やジェンダー規範の形成にフェミニズム運動はどのように関わったのか、その論理と相互作用を具体的に検討するために、公教育省において農村における女子教育カリキュラムを作成したエレナ・トーレスに焦点をあて検討する。

Ⅲ 第一波フェミニズム運動と女子教育

ディアス独裁政権のもとで、外資の導入により国内の産業化が加速され、比較的安定した政治状況の中でシエンティフィコスによる近代化政策が実施された。近代的教育制度の導入も、その一つである。1888年に公布された公教育法のもとで、初等教育が6歳から12歳まで義務化され、1890年には女子師範学校設置令が公布された。第一波フェミニズム運動の主な担い手は、教育を受けた新興の中間層出身の女性たちだった。

産業化の過程で貧富の格差が増大する一方で、工業労働者や中間層などの新興社会層が拡大した。ディアス時代の政治体制は、新興の中間層の社会的要求に対応することができず、その不満からディアス反再選運動が起こった。反再選運動とともに、教育においてもカトリック教会による既存

の教育を批判する運動が、中間層を形成する教師たちの間から起こった。女性の労働市場が限定されていた中で、中間層で経済的自立を必要とする、教育を受けた女性たちの専門職の受け皿は教職であり¹⁾、新たな教育運動はフェミニズム運動にも少なからぬ影響を与えた。

1 合理主義学校運動とフェミニズム

伝統的な教育を批判し、近代的な教育方法論を取り入れようとしたメキシコの合理主義学校運動は、労働運動とともに展開された。1912年9月に「世界労働者の家」(Casa de Obrero Mundial)が運輸関係の労働者や製造業の被雇用者、サービス関係の労働者、学生、インテリなどの無政府主義者たちにより設立され、ソノラ、タマウリパ、シナロア、グアナファト、タバスコ州などを中心に運動が広がった。メキシコでは、ホセ・デラルス＝メナ (José de la Luz Mena) を中心に、スペインの「近代学校」を継承する合理主義学校²⁾が導入され、「世界労働者の家」は1914年10月にこの合理主義学校教育を支持する姿勢を明らかにした。この労働運動に参加した教師たちは、カトリック教会による伝統的教育を「牢獄の教育」と批判し、教育の非宗教化を掲げ、科学的知識に基づく自由な教育を主張した (Mena 1941; Assad 1986)。合理主義学校の教育は、実践的な職業教育と結びつき、子どもの自然な心身の発達をうながすために、学校には調理室、遊戯室、音楽室、図工室、写真室やタイプ室を備え、児童の興味を中心に展開されることを理想として、純粋理性や進化論に基盤をおき、デューイの教育論やオーウェンの社会主義を視野に入れた革新的な教育を展開しようとした (Mena 1941)。

1915年に護憲派のカランサに任命されユカタン州知事となったアルバラードは、「世界労働者の家」を設立し、農民の債務帳消しや労働者の保護、最低賃金と最大労働時間の制限、スト権の承認などさまざまな社会改革を実行するとともに、教育改革に着手した。アルバラードは、1915年に州の農村教育法、公教育一般法を矢継ぎ早に公布した。農村教育法では、初等

教育を非宗教、義務、無償教育と規定し、農村地域に1000近い学校を設立し、1年間で生徒数を2倍、教師数を68%増加させた (Macías: 67)。同州では、すでにホセ・デラルス＝メナを中心に合理主義学校運動が展開されていたが、アルバラードは一連の社会変革推進のために、教育会議、フェミニズム会議、労働者会議を次々と開催した。

1915年9月にメリダで開催された第1回教育学会議では、小学校教育は「自由」に基づき、「心理的、身体的な発達」を促すために「農園、作業場、実験室、生活」を整えた「合理的教育」であることが決議された (Assad 1986: 11-12)。この会議には多くの女性教員が参加し、参加した女性教員を母体として、翌年の1916年1月に第1回フェミニズム会議がアルバラードにより招集された³⁾。

第1回フェミニズム会議には、①伝統のくびきから女性を解放する手段、②そのために小学校が担うべき役割、③女性のために州が振興すべき学問や教育、④女性が担うべき公的役割、に関する四つの諮問がアルバラードから出された。実質的には女子教育に関する諮問会議と言えよう。特に、第二の諮問に対し、教育会議に呼応して、合理主義教育に基づき、すべての小学校を合理主義学校に転換することが承認された。

合理主義教育の議論では、「大部分の女性は結婚し家庭に入るのだから」、一般的な女子教育として「理論より実践を教えること」が重要であり、「全ての食事を作り、おいしい菓子作りを教え、一人で買い物に出かけ、家事を差配し、裁縫を教え、主婦となるように女性を教育すること」、「女子の場合、主に人形遊び、ままごとの中で (将来に向け準備する) 必要性」が述べられている (CFY: 154-155)。また、「合理的で科学的な方法で母としての使命を果たす目的で、女性を家庭のために教育する」ことと、必要に迫られた場合「自分自身で生計を立て生きていくために女性を教育する」という補足意見が出された (CFY: 190-192)。

合理主義学校運動では、手作業などを通じた実践的職業教育や児童の発達に適応した教育が要求される中で、従来から慣習的に女性に課され、大

多数の農村女性が農場での労働とともに生活の一部として果たしてきた役割が、家族の再生産領域を担う具体的な主婦の仕事内容と役割として女子教育の議論の中で提示された。

2 女性の身体管理・「性教育」とフェミニズム

ユカタンの第1回フェミニズム会議では、女性の教育に関連して、はじめてセクシュアリティの問題がフェミニズムの俎上にあがった。エルミラ・ガリンド (Hermila Galindo) は、ユカタンのフェミニズム会議に「未来の女性」(La mujer en el provenir) と題した開会演説を寄せた。ガリンドは、1915年に『現代女性』(*la Mujer Moderna*) を創刊し、革命運動では護憲派を支持するとともに、カランサの秘書として政権中枢と深い関わりがあった。『現代女性』の中で、ガリンドは女性解放と国の政治的展開とは不可欠に結びついていると述べ、この雑誌の刊行に「祖国と女性の救済」への貢献という二重の目的を掲げた。

ガリンドの開会演説は、ベーベルの『女性と社会主義』を下敷きに⁴⁾、女性にも「性本能」あるいは「性欲」があり、結婚だけが正当にセクシュアリティを行使しうるのではないことを示唆した。また、人口減少や人種退化などの国にとって最も重大な危機を解決するために、性教育を実施することにより、女性が性の自然の要求に対して自分を守る「鎧」をまとうことができる」と述べた。

この演説は、女性と性欲、そして性教育に触れたことから、会議運営委員会内部でも、ガリンドの演説を会議でボイコットするべきだという議論が噴出した。また、ガリンドの主張の背景には、「女性が(生物学や解剖学などの)有益で不可欠な知識を得られずにいる」既存の教育、つまり伝統的なカトリック教会に対する教育批判があった。ガリンドは、伝統的教育の結果、女性の身体に関する知識が大部分の家庭で理解されていないために、貧困層の子沢山や、さらに貧困な環境ゆえに「人種の劣化に拍車をかける」と主張した。そして、「人口の減少と人種の劣化」を解決する義務が

革命運動にあると述べた。この演説には、合理主義学校運動のカトリック教会教育批判と、当時の欧米の優生学⁵⁾の影響が見られる。第1回フェミニズム会議では、法的な男女平等へ向けた民法改正や女性参政権の要求など、その後のフェミニズム運動に大きな影響を与える議論がされた。同時に女性が必要とする教育についての議論が行われたが、ガリンドが問題提起した女性の身体に関する知識の必要性や性教育は強い反対にあい、決議には入れられなかった。

性教育や出産調節に関する政策は、ユカタン州で1921年に州知事に選出され、急進的な社会主義改革を実行したフェリペ・カリーリョ＝プエルトの妹エルビアが組織する社会主義フェミニスト抵抗同盟の支援のもとで実施された。その他に女性解放政策として、州レベルの女性参政権の実現、自由意志に基づく新しい婚姻法、離婚の簡略化、農民女性の組織化が行われた。マーガレット・サンガーが書いた出産調節のためのパンフレットが配布され、出産調節を指導するためのクリニックが設置された。カリーリョ＝プエルトはサンガーを招聘したが、その代わりに「アメリカ産児調節同盟」執行部委員長アン・ケネディが来墨した。

1922年に、アメリカ合衆国の参政権運動に影響を受けて、マルガリータ・ロブレス＝デメンドサが、汎アメリカ大陸女性同盟のメキシコ支部を設立し、1923年5月20日から30日にかけて汎アメリカ大陸女性同盟フェミニズム会議第1回メキシコ大会がメキシコ市で開催された。この会議には、アメリカ合衆国からのさまざまな組織の代表とともに、メキシコの20以上の州から代表が送られ、100名が参加し、市民権、政治的権利、性の問題、出産調節、経済的問題、女性労働者の子どもの保護、女性の保護、の7項目にわたり議論が行われた。当初のテーマは、市民権、参政権の要求だったが、エルビア・カリーリョ＝プエルトをはじめとするユカタンの社会主義派フェミニストたちは、セクシュアリティ、出産調節、自由恋愛、学校での性教育を決議に盛り込むように要求し、要求が入れられない場合は会議のボイコットをするという圧力をかけた。会期最終の二日間は、このテーマ

が議論されたが、出産調節を決議に盛り込むことは全体会議で否決され、代わりに産前産後のクリニックの設置が決定された。性教育は用語そのものが決議文から削除された。一方、教育に関しては、①すべての階梯の公立学校の設立と男女共学、②女性の経済的問題に因應するため職業・技術学校の設立、③農村の女性を対象とした衛生、育児、家政などを教える実験校の設立が決議された。

以上の二つのフェミニズム会議では、女性のセクシュアリティや性教育をテーマとすることに対して、フェミニストの間での合意は得られなかった。また、ユカタン州での急進的な女性解放政策や会議の議論が新聞を通じて伝えられると、特に、一連の出産調節を促進する動きに対して、さまざまな反対運動がカトリック教会や親たちから起こった。その代表的なものが、日刊新聞『エスセルシオール』(*Excelsior*)による「母の日」のキャンペーンである。『エスセルシオール』は、5月10日を「母の日」として全国の小学校で祝う運動を展開し、子沢山の自己犠牲的母親像を理想として称賛した(松久2007)。

女性のセクシュアリティや生殖に関わる身体管理の問題は、一部のフェミニストたちに女性解放のための重要な課題として認識されたが、全体としての合意を得ることはできなかった。そして、これらの問題は、近代国家形成の過程で、「母性」の問題へと置き換えられていくことになる。次に、産む性、そして家事労働を通じた再生産を担う性として「母性」が強調され国民国家の成員として女性が国家に統合される過程を、合理主義学校やフェミニズム会議に深く関与しながら、教育官僚として女子教育の立案をしたエレナ・トーレスの活動を軸に検討する。

IV フェミニスト教育家 エレナ・トーレス

エレナ・トーレスは、メキシコのフェミニズム運動と公教育政策の接点に位置している。エレナ・トーレスの個人史をたどり、彼女がフェミニズム運動でどのような立場にたち、教育活動に関わったかを明らかにするこ

とにより、メキシコ革命後の国民国家形成と近代化への民衆動員がされる中で、フェミニズム運動が国家の近代化の流れに合流していく過程を検討する。

1 フェミニストとしての自己形成

エレナ・トーレスは、1893年6月23日にグアナファト州メジャード鉱山 (el Mineral de Mellado) に生まれた。グアナファトの公立小学校卒業後、個人で会計とタイプを学び、1907年に会計係として就労しつつ、州立学校教師が貧しい女子のために行った夜間授業を履修している。

グアナファト州の教育状況は、1900年の識字率が12.2%、1907年でも就学率は19.5%だった。小学校修了後の女子中等教育は女子師範学校1校のみで、女子の職業学校は設立されていなかった。女性の専門職はほとんど教員しかなく、州の教員846名中、女性教員は483名、57%を占めていた (Bazant 1993: 262-267)。

エレナ・トーレスは、貧しい農民層でも富裕層でもない中間階層出身で、当時の地方では女性としての可能なかぎりの教育を受け、経済的な自立を必要としていた。州の教員資格試験に合格し、1912年に教員としての経歴をグアナファト州サンタアナ鉱山の小学校で開始した。教師として働くかわら、「世界労働者の家」の学校でも教師を務め、党本部の速記者となり労働運動に加わった。『フェレールの声』(La voz de Ferrer) に反独裁政権の記事を投稿し、「世界労働者の家」運動に参加する中で、アルバラードやエルミラ・ガリンドなどの護憲派の人々、そしてカーリーヨ＝プエルトとも親交をもち、活動の場をユカタン半島に移していった。

1916年からエレナ・トーレスはユカタン州の労働者学校で働き始め、アルバラードが招集したフェミニズム会議に参加し、フェミニズム会議の冒頭でエルミラ・ガリンドのメッセージを読み上げた。その傑出した態度と意見が認められて、アルバラードにより招聘され、1917年から19年の間、ユカタン州でメキシコ初のモンテッソーリ学校や労働学校の設立、メリダ

の美術学校での教育などさまざまな教育活動に加わりながら、ユカタン社会党の黨員となり政治活動を行った。1918年にモツルで開催されたユカタン社会党第1回大会では、エレナ・トーレスは女性解放プログラムの草案作成に加わるとともに、合理主義教育を支持し社会主義師範学校の設立を提案した。エルビア・カリーリョ＝プエルトが社会主義フェミニスト抵抗同盟を設立し、農村やアシエンダをまわり農民女性を組織したのもこの時期である。

メキシコが経済危機に見舞われ、連邦政府が連邦区の教師給与補助を打ち切ったのを契機に1919年5月12日に大規模な教師のストライキが起こった。学校教員の過半数は女性であり、かつ女性教師は男性教師と比べ差別的な待遇を受けていた。このストライキを契機に首都で女性教師が中心となる組織が形成された⁶⁾。6月にユカタン社会党は、首都圏のフェミニストと連携するためエレナ・トーレスを派遣した。エレナ・トーレスは、9月から10月に全国女性審議会 (Consejo Nacional de Mujeres) の設立に参加し、第一書記に任命された。後に、エルビア・カリーリョ＝プエルトとともにメキシコ初のフェミニストによる政治組織であるメキシコフェミニズム審議会 (Consejo Feminista Mexicana) を設立し、会長となった。同年11月24日にメキシコ共産党が結成されると、メキシコフェミニズム審議会は、共産党傘下のフェミニズム戦線となった。メキシコフェミニズム審議会の会員は、大部分が女性教員と女工で、女性のために図書館の開設や雑誌『女性』の刊行に携わった。その後、エレナ・トーレスは、メキシコ共産党の結成に加わり、共産党の会計を担当し、機関誌『共産主義者』の刊行にも加わっている。次第に首都圏での活動が多くなったが、その間、メキシコ大学で生物学を学び、栄養学や性現象への興味をもった。これが、後に農村教育での家政科教育に関わる契機となった。

2 公教育省での活動

カランサ派とメキシコ北部出身者のオブレゴン、カジェス、デラウエル

タラを中心とするソノラ派の対立が次第に顕在化し、ユカタンの政変に巻き込まれたエレナ・トーレスは、首都に活動の場を移した。デラウエルタ暫定政権のもとで実施された大統領選挙により、1920年に大統領となったオブレゴンの政権下で、公教育制度の基盤が整備され始めた。1921年に公教育省が設立され、メキシコ国立大学学長だったホセ・バスコンセロスが初代公教育相に就任した。バスコンセロスは、公教育を国民統合の手段として位置づけ、壁画運動、先住民の国民国家への統合、農村教育などに力を注いだ。教員の不足を補うため、名誉教師の制度を設立し識字運動を実施した。また、ガブリエラ・ミストラルを招聘して、彼女の名を冠した家庭学校を設立した。ミストラルは女子教育において母性を称揚し、女性の誰もが「精神的母性」をもつと主張した。バスコンセロスは、「精神的母性」を教育に適用し、女性であるだけで男性よりも教師としてふさわしい能力をもっていると述べ、多くの女性たちを識字運動に動員した。(松久2007)。

27歳のエレナ・トーレスは、1921年2月から5月にメキシコ国立大学の家政教育高等専門学校 (Escuela de Enseñanza Doméstica) の教員となった。1921年5月から1923年10月まで、学校朝食サービスを担当し、国立大学技術教育局所轄学校の嘱託視学官として運営に当たった。さらに、1923年7月から8月にかけて、実験的な文化伝道団 (Misiones Culturales) 計画に携わった。この計画は、1923年11月から10カ月間、モレロス州でエレナ・トーレスが団長となり実施され、クアウトラで夜間自由農民学校を5カ月間運営した。

公教育省での活動のかたわら、エレナ・トーレスはメキシコのフェミニズム運動の代表として海外に派遣された。1922年にアメリカ合衆国のボルティモアで開催されたアメリカ大陸女性会議では、メキシコフェミニズム審議会の代表としてメキシコ政府から派遣され、北米支部の副会長として選出された。メキシコ代表は、メキシコフェミニズム審議会の活動と教育に重点をおいた報告を行い、エレナ・トーレスが学校朝食、女性の人身売買、ユカタン州の活動について報告している。1923年の汎アメリカ大陸女

性同盟フェミニズム会議でも議長を務めた。

1924年、エレナ・トーレスは、国際機関の奨学金を得て、コロンビア大学に留学したが、その間メキシコ代表として、1925年にワシントンで開催された汎アメリカ大陸女性同盟会議に出席している。終始親交のあったバスコンセロスは大統領選に出馬するために公教育省を辞任したが、エレナ・トーレスは、1929年に帰国し女性を組織してバスコンセロスの大統領選を支援した。1930年に公教育省を追われ、再びアメリカ合衆国に渡ったが、カジェス政権批判、メキシコフェミニズム審議会とメキシコ地域労働者連合 (Confederación Regional Obrera Mexicana) との確執、バスコンセロスの大統領選挙落選などがその原因だった。

1932年、39歳のエレナ・トーレスはサエンスにアメリカ合衆国から呼び戻され、再び公教育省での活動を開始した。同年2月に、文化伝道団および農村師範学校局任命の文化伝道団巡回教員 (maestra de Misión Cultural Viajera) の辞令が出されている。1933年3月23日には、女性農村教師と村のための家政科と民芸品製造のためのラジオプログラムを制作し、週四つの番組を担当した。1934年1月16日付けで、家政学の専門家、同年3月17日には、農業教育および農村師範学校局公務員の辞令が出ている。アメリカ合衆国で教育を受けた農村教育専門家として公教育省の中での地歩を次第に固めていった (AHSEP)。

グアナファト州の小さな村の教員となったエレナ・トーレスが、当時の労働運動や合理主義学校運動に加わり、その過程でフェミニストとして頭角をあらわし、さらにキャリアを積んで教育官僚となっていく過程がみてとれる。エレナ・トーレスは、自力でキャリアを獲得したエリート専門職女性であるが、一方でフェミニズム運動を担った中間層の知識人女性、専門職女性の経験を共有している。フェミニズム運動を代表し、女子教育に力を注いだエレナ・トーレスが、公教育の中で女子教育をどのように位置づけ、近代国家形成に女性が果たすべき役割を考えたのかを通じ、第一波フェミニズム運動の参政権運動とは別の側面を解明したい。

V 公教育における女子教育—エレナ・トーレスの女子教育観を中心に—
革命後の国家再建の中で、女性たちはどのような理想を持ち、国家においてどのような役割があると考えたのだろうか。近代公教育制度は、新しい社会に向けての人材育成の役割を担っていくが、女性の近代国家における役割、そしてその役割を果たすための女子教育は、どのように構想されたのだろうか。第一波フェミニズムで提示された女子教育のテーマ、つまり、女性の公的役割、それを担うために必要とされる教育、具体的には性教育や家庭科教育がどのように展開されたかを、エレナ・トーレスの女子教育観を中心に考察する。

1 女性の公的役割と性教育

20世紀初頭において、女性のセクシュアリティについては公の場で話題にすることさえタブーであり、フェミニストたちの間でも反発があった「性教育」とは何か、をまず検討する必要があるだろう。20世紀初頭、「性教育」という言葉には解剖学的知識から生殖のメカニズム、出産調節に関する知識までの幅があり、性教育の内容について社会的な合意ができていたわけではない。具体的な内容より、その種の知識を学校で扱うべきかどうか、という議論の段階だった (Morales 1986: 631)。具体的なテキストとして、ユカタン州で翻訳、配布されたサンガーの出産調節に関するパンフレットが性教育の象徴として扱われた。ユカタン州やミストラル家庭学校でパンフレットが配布されると、新聞はスキャンダルとして取り上げ、母親たちの反対デモや「母の日」キャンペーンを引き起こし、カトリック教会をはじめとする保守層からの標的となった。

汎アメリカ大陸女性同盟メキシコ会議でユカタンのフェミニストたちがこのテーマを議論するように要求した時、エレナ・トーレスは議長として性教育や出産調節を決議から外した。しかし、個人的には出産調節を擁護する立場を取り、1925年に『出産調節』にメキシコの出産調節に関する記事を投稿している (ABCL 1925: Vol. V, no. 7: 208)。この中で、出産調節

に関する問題について、「貧しい夫婦が教育することが可能な子どもの数を決定できる」ことは中産階級の夫婦だけでなく、家計を補助する女工や子どもにより良い教育を受けさせたいと思う人々にも評価されると述べている。しかし、メキシコの農村女性は無知のため、初歩的な衛生の知識もなく、子どもの未来を考えるのに不可欠な知識を獲得することもできない。出産調節により、夫に捨てられて困窮し悲惨な目にあっている女性や子どもの数を減少できると考え、優生学によって方向づけられる将来に期待をよせている。また、カトリック教会の司祭たちが女性に子どもを産むことを勧めるために、出産調節が女性たちの間でなかなか受け入れられない状況を嘆いている (ABCL 1925, Vol. IX, No. 7: 208-209)。

エレナ・トーレスは、その考え方の背景に、イギリスのハプロック・エリス (Havelock Ellis) から性教育に関する影響を受けたことを明らかにしている。エリスは、イギリスの優生学の担い手の一人であり、急進的な社会主義者でもあった。ダニエル・J・ケヴルズによれば、「エリスにとって、優生運動は女性をヴィクトリア朝時代のくびきから解放して性の自由を獲得させるものでなければならなかった」(ケヴルズ1993: 118)。また、エリスの見解では、「優生問題自体が優れて女性問題」で、「優生学的理由から女性は自分自身の肉体だけでなく、自分の生活そのものも自分で決定することが必要」と考えた。エリスは、「女性解放運動を発展させ母性文化を開花させなければ、優生主義の実現はあり得ない」(ケヴルズ1993: 118) と言い切った。エリスの影響を受けたエレナ・トーレスは、女子教育についても、「女性の特性を理解し、性的本能を克服して社会的興味に振り替える」ことの重要性を説き、そのためには性教育が不可欠であると考えていた (AET 1934: 14)。

当時のメキシコを含めたラテンアメリカでは、優生学は近代化推進に有効であると為政者たちに考えられた。サンガーに代わり来墨したアン・ケネディは、カリリーヨ＝プエルトの甥の仲介で、メキシコシティに10日滞在し、教育相バスコンセロスやデラウエルタ、そしてエレナ・トーレスと

も会見した。バスコンセロスは、サンガーのパンフレットを熱心に読み、出産調節に興味を示したと報告されている。(ABCL1923: Vol. VII, No. 10, 254-255)。

メキシコの社会主義的フェミニズム運動は、優生学を女性解放の手段と考えた。メキシコ流の優生学は、環境改善のための衛生運動や出産調節と結びつき、伝統的なカトリック規範から女性を解放し、出産調節により産む子どもの数を女性が決定することで、子どもにより良い教育を受けさせ、優良な国民を育成することを可能とするという方向づけをもった。しかし、この文脈における出産調節は、女性の性と生殖に関する「権利」ではなく、国家に対して女性がなしうる貢献として考えられた。教会によって私的領域に封じ込められていた女性のセクシュアリティが、健全な「国民」を産み育て国家に貢献することを通じて公的な役割を担い、それによって女性が国家に直接接合することが可能となると、エレナ・トーレスをはじめとする社会主義派のフェミニストは考えた。

2 女子教育と女性の公的役割

公教育省発行の『教員通信』において、エレナ・トーレスの「最大の功績は、農村に適した食物と料理を教育に導入した」ことであると述べられている (*Correo del Masetro*, Número59)。また、その著書『農村教師のための家庭科原理』 (*Pricípios de economía doméstica para ayudar a las maestras rurales*) は、新陳代謝の概念を紹介し、年齢に応じた栄養摂取、衛生の内容を含み、農村女性に都市の女性並みの知識を普及することに努めたと評価された。こうした家庭科教育の内容は、文化伝道団の目的の一つである農村の生活レベルの向上のためだけでなく、フェミニストとしてエレナ・トーレスが農村女性の社会的役割を視野に入れたものと言えよう。優良な国民を産み育て、「人種の退化」を改善する女性の公的役割を前提として女子教育がどのように構想されたのだろうか。

チリの教育会議におけるメキシコ代表としての講演は、エレナ・トーレ

スの女子教育観をよく示している。講演で、エレナ・トーレスは「骨格や筋肉の構造において明らかに男性は女性よりも勝っている。女性の一般的な体格は、男性に対して、母性の責任を引き受けるために生物学的に完全に適合しているという生物学的優位性が与えられている。優位かどうかは機能によって異なる。」(AET 1934; 9) と述べ、本質主義の立場に立ちながらも、違いが男女の優劣ではなく役割の違いを意味すると主張した。従って、男女の優位性について論じるのはばかげており、女性の「適性」に応じた教育が必要であると説いた。エレナ・トーレスの女子教育観は、当時のフェミニストが共有していた「差異の中の平等」観に根差している。「良き家庭は偉大な国家を作り、経済活動に個人が責任をもつことは強力な国家を作る」と述べ、女性が教育を受けることにより「良き家庭」を作ることによって国家に貢献できると考え、そのための家庭科教育がいかにあるべきかを、教育官僚として具体化していった。

エレナ・トーレスは、「特性をもつ教育の発展のために性差を基本的要素として考慮した」女性の教育を次のように定義している。

「一般に、女性のための教育課程には三つの側面がある。第一は、物理的な教育、つまり家庭科で、公教育省によりしかるべく認められたカリキュラムがつくられている。第二は倫理教育で、自分の生物学的な発達に必要な知識やメキシコ社会によって遵守されるべき倫理的規則として認められた学説の検証、そして最終的には既存の社会の悲惨さに対する最善の救済策として、しばしば熱心な信心深い人々によって宣伝されている理想を検証・解明する内容である。第三は精神面の教育で、青年期の性的本能に関する教育によって女性の私的な問題を解決しようとするものである。」

(AET, 1934: 43)

エレナ・トーレスは、女子教育において実践的な家庭科教育、非宗教教育、性教育が不可欠だと考えた。しかし、性教育に関しては、カトリック教会と保守層の反対により、撤退をせざるをえなかった。メキシコ優生学会は、1932年に、青少年の妊娠数の増加に対処するため、教育相ナルシ・

バツソルスに公教育に性教育を導入するよう要請した。1933年にバツソルスは、初等教育、中等教育に性教育を導入しようとしたが、格好の政治的対立軸として保守層から強力な抵抗にあい、他の要因とあいまって1934年に退陣を余儀なくされた。

3 農村における家庭科教育

家庭科教育に関して、エレナ・トーレスは農村教育を通じて自身の考えを実行していった。まず、農村に教育を普及させるために組織された実験的文化伝道団の実施責任者となった。実験的文化伝道団では、識字教育、農村教師養成の他に、地域の環境や衛生状態の調査、保健衛生政策や農村の生活改善などの目的をもつ多様な活動が行われた。都市では、小学校教育終了後の職業訓練教育として、「ガブリエラ・ミストラル家庭学校」などの女性のための職業学校が設立されたが、農村地域にはそうした学校はなく、初等教育の普及もままならず、女子教育についてはほとんど考慮されていなかった。エレナ・トーレスは農村教育に携わる中で、「初等教育カリキュラムにおける家庭科の基本的目的は、農村の生活水準を上げることで、決して都市の生活習慣を持ち込むことではない」（AET 1934: 30）と述べ、小学校教育に農民女性が置かれた環境に適応した家庭科を導入するためのプログラムを開発しようとした。

公教育省の家庭科プログラムについて、エレナ・トーレスは以下のような見解を述べている。「公教育において家庭科（*economía doméstica*）は重要な教科であり、日常生活と関連した活動が社会的価値をもつという観点から考慮するべきである。家庭科では、衣食住と個人の清潔が社会的に重要だと考えられる。農民社会の改善と国家の進歩をもたらすために、公教育省が家庭科を小学校で実施することが決定的に重要であると認識している。」（AET 1934: 14）

エレナ・トーレスは、公教育省が農村教師のための手引書として発行した『農村教師』の記事やラジオ番組を担当し、家庭科カリキュラムの体系

化を図った。その集大成である『農村教師のための家庭科原理』は、栄養と衛生の二つの分野から構成されている。「家庭科は家庭で使用されているものを使い、入手可能な資源を正しく使う方法を教える」。家庭科教育を農村女性に教える場合、家族の生活に責任をもつという観点から、(早婚を考慮して) 14歳から16歳で一人前になるように、早期に始められるべきだと考え、6歳～9歳、9歳～12歳、12歳～14歳の児童の3段階の年齢層に応じた家庭科の目的設定とカリキュラムを作成した。

具体的内容を紹介すると、6歳～9歳の家庭科教育は、子どもに衣食住、清潔の習慣を身につけさせることを目的とする。特に女子に家庭ですぐ利用できるような技術を身につけさせる。台所仕事を教える授業は、30分から40分間で、それぞれ昼食、おやつ、朝食の準備を核に作られ、食事を準備するために調理に必要な手順、手洗い、食材を洗う、食器洗い、火の始末、さらに3回の決まった時間に食事をする習慣、口腔の衛生、家の整理整頓、掃除、洗濯などの周辺の作業が教授内容に組み込まれている。また、人形遊びを通じて、小物を縫うことから始め裁縫の技術を身につける。9歳～12歳では、料理や食物の保存法が教えられる。12歳～14歳では、女子生徒が家庭の全般的管理運営の責任を負えるように訓練することが目的として挙げられている。

こうした教育内容を通じて形成される主婦の役割を以下のように記している。「完璧な家庭管理の主要条件は、主婦 (ama de casa) としてふさわしい女性によって秩序と清潔さを導入することである。秩序は経済にとって基本的な要素である。すべての活動を時間どおりに行い、あるべき場所にもものをおき、時間を節約する。家族の部屋を管理し、家周りに注意を払い、通りと溝を清掃し、清潔を保つのは主婦の毎日の仕事である。教育のある農民女性は、あらゆることに目配りできるように農業に必要な知識を含めてすべてをどのようにすべきか知らなければならない。勤勉の手本となり、混乱に備えることは主婦の主要な仕事である。」(AET SEPs/f: 41)

さらに、主婦として「この(母性の)社会的目的は、家族の経済的責任

と家族の成員すべての高潔な行動を促すように自己犠牲の模範となる倫理的な責任を引き受けることである。自己犠牲とは、悪しき扱いを容認することを言っているのではない。女性の積極的な意味での自己犠牲は、家族の他の成員のために自己の快適さを放棄することにある。」(AET SEPs/f 45)と述べている。これは、「母の日」を通じて形成された母親像に通底するが、一方「自己犠牲的な母親」像では、主体的に家庭での役割を担う主婦像を示唆している。

この家庭科カリキュラムが実際にどのように実行されたかを知ることは難しいが、当時の農村教師への聞き取り調査の中に手がかりを見出すことができる。タバスコ州の教師への聞き取り調査では、午前中の授業が終わったのち、合理主義学校やその系統の野外学校をもつ小学校で午後作業を行い、女子生徒は縫物や料理作りを学んだと報告されている (AP 1987a, b, c; 1988)。当時の学校教育の普及状態を考慮すれば、エレナ・トーレスが作成した家庭科カリキュラムがその意図どおりに実施されたかどうかは疑問である。むしろ「家庭科教育」の意義は、公教育省においてカリキュラムとして定式化されたことで、ラジオ番組や教師用の手引を通じて家庭科のあるべき姿が全国的に伝達されたことであろう。当時の言葉を使うならば、「科学」としての「家庭科」が教科として構成された。裁縫や刺繍、「女らしい手仕事」は、女子教育の一部として、古くは植民地期から、またディアス時代には女子職業教育として教えられていた。しかし、それは私的な家庭内の作業として、あるいは家計補助が理由であり、その技術が「国家の発展」と結びつくことはなかった。メキシコ革命を経て、女子教育が国家と結びついて語られ、農村を含めた「近代国家」において女性の社会的役割として位置づけられる規範的な意味が加わった。

VI 結論 女性解放と家庭科教育

フェミニストであり著名な教育官僚であったエレナ・トーレスの活動を軸に、フェミニズム運動と公教育における女子教育政策の相互関係を検討

した。エレナ・トーレスの経歴の中に多くのフェミニストとの共通点を見出せるとしても、それをもって当時のフェミニズム運動の流れを代表させることはできないし、それはフェミニズム運動を多角的に見るといふ本論の意図と相反することは言うまでもない。しかし、エレナ・トーレスの活動を軸にフェミニズム運動と1920年から1930年前半までの教育政策を観察することにより、第一波フェミニズム運動の主流を占めた法的平等を要求するリベラルなフェミニズム運動の枠組みでは把握できなかった反教会・近代化運動の潮流の一つである合理主義運動や欧米の優生学の影響を明らかにした。また、国家再建政府と公教育政策が、フェミニズム運動を取り込む中で、女性の自立的身体管理としての性教育や出産調節を切り捨て、育児と家庭管理を通じて国家に貢献する母性を基礎とした新しいジェンダー規範を取り入れたことを検証した。

メキシコ革命を経た女性たちは、教育運動や衛生運動に参加し、近代化過程の国家に動員されていったが、フェミニズム運動も国家への貢献を模索しつつ男女平等な法的権利や政治参加を要求した。エレナ・トーレスの業績は、家庭科教育カリキュラムを「科学」的に構築することにより、国家の近代化に対する女性の役割を明示したことだった。家庭科教育は、家族の栄養、衛生、健康を家庭において管理することを主婦の役割として位置づけ、家庭科教育を通じて女性の社会的役割を農村教育にも導入することにより、女性のジェンダー役割を明示した。

これは、ジェンダー論の視点から見ると、家庭科を通じて女子教育を定式化し、結果として「女性は家庭に」という私的領域に女性を閉じ込めるジェンダー規範を固定化することに加担したことになる。しかし、それ以前の時代には、女性は男性に比べその存在自体が劣等であり、家庭においても男性の支配を受ける劣等な社会的存在として位置づけられていた。「女子教育」は男子の教育よりもレベルが低く、女子のための私塾「アミーガ」に見られるように、わずかの読み書きと裁縫などの手仕事を中心とした別枠の教育として存在した。ディアス時代以前の女子教育は、男子教育とは

本質的に異なり、男女平等の教育どころか女性の教育の意義さえ十分に理解されていなかった。そうした時代背景の中で、私的領域であろうとも家庭において「差異の平等」を確立すること、そして女性に国家への貢献という社会的役割を付与することは、公的領域に進出する女性解放の前段階として考えられ、近代国家への女性の統合を意図していた政府に「オフィシャル・フェミニズム」として受け入れられたといえよう。

国家再建期に形成されたジェンダー規範は、ローヨが指摘するように、保守的かつ伝統的ではあるが、メキシコ革命後、それ以前の伝統的なジェンダー規範に修正が加えられた。修正された女性のジェンダー規範は、国民を育成することにより近代国家の「公的領域」を下支えする役割をもつ。家庭は、国家の管理内にあるという意味で完全に私的な領域ではなく、国家と繋がりをもつが男性のための公的領域から女性を排除しつつ公的領域を下支えする従属的領域として、その位置づけが修正された。第二波フェミニズムにより、本質論的観念から自由になる以前において、「家庭」という私的領域においてさえ劣等性を刻印された女性が、「科学的」な家庭科教育を習得することにより家庭を通じて国家に貢献し、それによって家庭での男女平等な立場を確立しようとしたのである。

健全な「国民」を産み育て、家庭を通じて国家の発展に寄与するという女性に課せられた新しいジェンダー規範は、性教育や出産調節に反対する保守層との対立の中で、次第に女性による身体の自己管理という女性の主体的な部分が削除され、「母の日」に象徴される国民的合意として、国家と家庭との関係性の中で自己犠牲的な母親像が生成された。その意味で、ヴォーンが述べたように国家発展のもとで家庭の国家への従属を目的として家父長制は修正され強化されたが、フェミニズム自身も近代化と国家発展に協力する過程で家父長制を支える要因を含んでいた。

*本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号18530665) 平成17年度～19年度)「メキシコの近代公教育形成過程における教育のジェンダー化」の助成を得て行った。

註

- 1) 1900年の専門職において女性の占める割合は総数26,299人中7,214人である。そのうち女性教員の占める割合は、6,841人で女性の専門職の95%を占める (Bazant 1993: 267)。
- 2) メキシコの合理主義学校運動は、スペインの影響を受けて開始された。1908年にスペインのバルセロナでフランシスコ・フェレール＝グアルディア (Francisco Ferrer Guardia) が教会の教条主義から自由で科学に立脚した「近代学校」を設立した。「近代学校」で教えられた合理主義教育の目的は、新しい人間を形成することで、自然と社会に関する科学的知識と合理性を教え、社会的不正義と戦い、プロレタリアートを解放することを目的としていた。フェレールの近代学校運動を、カタルニア人フェレース (Amadeo Ferrés) がメキシコに渡り、合理主義学校として伝えた。フェレースは、労働組合主義の創始者で、1912年に「世界労働者の家」の設立に参加した。合理主義学校運動は、1917年憲法の教育条項の決定に大きな影響を与えたといわれている。
- 3) ユカタン州で開催された第1回フェミニズム会議の開催経緯および詳しい内容は、松久 (2005) を参照。
- 4) 1879年にライプニッツでアウグスト・ベーベルにより出版された。1883年に、内容に補訂を加え、『過去、現在、および未来の婦人』として出版された。ガリンドの演説へのベーベルの影響についての詳細は、Trinidad (2001: 109-137) を参照。
- 5) 1890年代から1930年代までの数十年間に、「優性学」に基づく運動は世界の30カ国以上で展開を見た。1924年の『優性学新報』(*Eugenical News*) には、「国際優性学委員会」の会員15カ国の名前が列記され、この他に「協力会員」国として、ブラジル、カナダ、コロンビア、メキシコ、ベネズエラ、オーストラリア、ニュージーランドなど七つの国々があった。それらの国々の優性学を基盤とした運動は多様で、ナチスドイツの民族浄化やアメリカ合衆国の移入民制限などが一般に知られているが、ラテンアメリカに共通してみられる「優性学」の特徴は新ラマルク主義の発想法を土台にしていたことと、「衛生学」と多くの点を共有したことだった。メキシコの優性学も新ラマルク主義の発想を土台として展開され、1920年代までメンデルの法則は知られていなかったし、その後も環境へ適応過程を通じて一定の性格を獲得するというラマルク主義理論は全面排除されることはなかった。その結果、メキシコでは、優性学は公衆

衛生と結びつき実践された。1917年憲法の73条 XVI 項では、国家の強力な主導のもとで保健政策を重視し、伝染病予防、特に性病の予防政策が実践されることが規定された。詳しくは Urias 2007参照。

- 6) Cano (1984: 40-48) によれば、1919年において首都圏の幼稚園、小学校、高等小学校、夜間学校の教員のうち男性28%、女性は72%を占めていた。憲法123条で同一労働同一賃金が定められていたにもかかわらず、女性教員は賃金面でも差別を受けていた。

参考文献・資料

一次資料

- ABCL (The American Birth Control League), *Birth Control Review*,
 “Birth Control in Mexico”, 1923. Oct. Vol. VII, No. 10, pp. 254-255.
 “Mexico by Elena Torres”, 1925. July, Vol. V, No. 7, p. 208.
 “Birth Control in Mexico”, 1925. July, Vol. IX, No. 7, pp. 208-209.
- AET (Archivo de Elena Torres), en el Archivo Histórico de Universidad Iberoamericana. (7 cajas)
 1934. “La Educación de la Mujer”, trabajo presentado por la delegación mexicana, 1934. 9. 16, Conferencia de Educación, Santiago, Chile.
 “La Economía Doméstica en las Escuelas y Comunidades Rurales”.
 Principios de economía doméstica para ayudar a las maestras rurales, SEP, s/f.
 1937. “Un libro de técnica a través de un curso de seis semanas: Trabajo Colectivo de los Maestros Rurales del Estado de México”, Bajo la dirección de Elena Torres, (México ediotrial Cultura).
 1939. “Las Misiones Culturales y la Educación Rural Federal”
- AHSEP (Archivo Histórico de Secretaría de Educación Pública)
 La Antorcha, Correo del Maestro, El Maestro Rural, SEP辞令.
- AP (Archivo de Palabra, Instituto de Investigaciones Dr. José María Luis Mora)
 1987a, Entrevista con la profesora Juana Lara de Palacios.
 1987b, Entrevista con la Maestra Ana María Vidal.
 1987c, Entrevista al profesor David Montiel.
 1988, Entrevista a la profesora Asunción Jiménez López.
- CFY (Congreso Feminista de Yucatán). 1916. Anales de Esa Memorable Asamblea (Mérida, Talleres Tipográficos del Ataneo Peninsular).

参考文献

- ケヴェルズ、ダニエル・J. 1993. 『優性学の名のもとに 「人類改良」の悪夢の百

年』西俣総平訳、朝日新聞社。

- ベーベル. 1928. 『婦人論 上巻・下巻』草間平作訳、岩波書店。原著 August Bebel, *DIE FRAU UND DER SOZIALISMUS*, 1879.
- 松久玲子編. 2002. 『メキシコの女たちの声—メキシコ・フェミニズム運動資料集』、行路社。
- 松久玲子. 2005. 「メキシコ革命期のユカタンにおける女子教育とフェミニズム会議」(『言語文化』(同志社大学言語文化学会)第8号第2巻12月)、229-259ページ。
- 2007. 「メキシコ革命期の女子教育とジェンダー規範の形成: 「母の日」と1920年代女子教育をめぐる」(牛田千鶴編『ラテンアメリカの教育改革』、行路社) 83-100ページ。
- Alatorre, A. M. 1961. *La Mujer en la Revolución Mexicana* (México: Nación).
- Assad, Carlos Marín. 1986. *Los lunes rojos, La educación racionalista en México*, (México: SEP Ediciones El Caballito).
- Bazant Milada. 1993. *Historia de la Educación durante el Porfiriato*. (México: El Colegio de México).
- Cano, Graciela. 1984. *La Huelga Magistral de 1919*, Tesis (México: UNAM)
- Jaiven, Ana Lau. 1993. *Mujer y Revolución, 1900-1917* (México: Instituto Nacional de Historia de la Revolución Mexicana).
- Larroyo, Francisco. 1976. *Historia Comparada de la Educación en México* (México: Porrúa).
- Lemaitre, M. J. 1998. *Elvia Carillo Puerto: La Monja Roja del Mayab*. (México: Ediciones Castillo, S. A, de C. V.).
- Loyo, Engracia. 1999. *Gobierno Revolucionarios y Educación Popular en México. 1911-1928* (México: El Colegio de México).
- 2008. “De sierva a compañera: la imagen de la mujer en textos y publicaciones oficiales (1920-1940)”, en Melgar, Lucía. compiladora. *Persistencia y Cambios, acercamientos a la historia de las mujeres en México* (México: El Colegio de México) pp. 159-184.
- Macías, Ana, 1982. *Against all odds, the feminist movement in Mexico to 1940* (London: Greenwood Press).
- Mena, Joé de La Luz. 1941. *La Escuela Socialista, su orientación y fracaso, el verdadero Derrotero*. (México: Antonio Sola No. 11).
- Morales Meneses, Ernesto. 1986. *Tendencias Educativas Oficiales en México: 1911-1934* (México: Centros Estudios Educativos, A. C. Universidad Iberoamericana).
- Rocha, Eva Martha. 1991. *El álbum de la mujer, Antología ilustrada de las mexi-*

- canas, Volumen IV/*El porfiriato y La Revolución* (México: Instituto Nacional de Antropología e Historia).
- Soto, Ann Shirlene. 1979. *The mexican women, a study of her participation in the revolution 1910-1940*, (California: Palo Alto).
- Trinidad, Laura Orellana. 2001. "La mujer del provenir" : Raíces intelectuales y alcances del pensamiento feminista de Hermila Galindo, 1915-1919. *Signos Históricos*, enero-junio, pp. 109-137.
- Tuñón, Esperanza. 1992. *Mujeres que se organizan, el Frente Único Pro Derecho de la Mujer 1935-1938* (México: Porrúa).
- Tuñón, Julia. 1987. *Mujeres en México, Recordando una historia*. (México: Regiones).
- Urías Horcasitas, Beatriz. 2007. *Historias Secretas del Racismo en México (1920-1950)* (México: Tusquets Editores México).
- Vaughan, Kay Mary. 1982. *The State, Education, and Social Class in Mexico 1880-1928*. (DeKalb: Northern Illinois University Press).
- 2000. "Modernizing Patriarchy, State Policies, Rural Households, and Women in Mexico, 1930-1940", in Elizabeth Dore and Maxine Molyneux, (ed.), *Hidden Histories of Gender and the State in Latin America*. (Durham and London: Duke University Press) pp. 194-214.